

下田市水道 ことはじめ



今では当たり前にある水道。しかし、当たり前が当たり前では無かった時代があります。下田市の水道にまつわるお話を、元下田市役所職員、土橋一徳さんに伺いました。

土橋一徳さん

～現在では使用されていない落合浄水場のポンプ室にて～

しようと心配しました。

中山技師はことさら温泉が気に入り、金谷旅館にも行きましたが、中原町の温泉浴場に朝昼晩だけでなく、随時出かけました。

不思議に思い、訪ねてみると、「下田の水はしよっぱいので、温泉を飲みに行くのだ」と、これはショックでした。旧下田町の井戸は全部塩気があるのは分かっていましたが、よもや大安寺の水道までは、と驚嘆しました。

下田町水道の歴史

江戸時代、寛文2年（1662）、下田奉行石野八兵衛のときです。

大浦坂の切り通しを掘り下げた後、工事費の残金が50両もあつたので、水道を敷設することにになりました。

中島口から新田町、殿小路町、長屋町、原町、大工町を通して坂下橋の右脇までの地下5、6尺に掘り込んで木管を埋設して利用したそうです。江戸の玉川上水、神田上水に次いで国内でも古いほうです。



下田で初めて使用されたポンプ

20年で廃止

ところが、天和3年（1683）下田奉行 今村傳三郎のとき、町は水が豊富で各家々に井戸があるから水道は不要である、一方、下田町は町数も多く、統治上必要だとして木管を掘り上げ、それで町の辻々に木戸を作った、とあります。たった20年弱で下田町の水道は消えました。遺構があれば文化財です。

簡易水道の始まり

昭和4年、水不足に耐え兼ね、大安寺水を水源として水道管を町中に通しました。今の大安寺駐車場の地下に井戸を掘り、さらに山に向かってトンネルを作って集水し、圧力ポンプで送り込んで全町に給水したのです。給水の仕組みは町々の角に

給水栓を作り、給水したのですが、すぐに水不足になり、朝夕2時間だけの時間給水でした。時間になるとバケツを持った町民が並んだものです。水源探しに小学校農業実習地ができる。昭和12年、時間給水を解消するため、水源探しです。付近の候補地は中村の辰の口湧水、相ノ山の一杯水、了仙寺水、大安寺水がありました。その中で有望だったのは大賀茂へ行く途中、相ノ山の一杯水であったので、ここを水源としたのです。掘り進み、湧水を期待したのですが、工事終了間際になっても水は少しも出ません。諦めかけたとき、トンネルの一番奥の手前、右側から水が噴出しました。1日200トンの湧水です。大安寺水は1000トンでしたから、合わせて300トンの湧水になります。みんなが喜びました。しかし、水口付近の田が枯れてしまい騒動になりました。

水資源

下田の水道の話は水源探しに終始したといっても過言ではありません。頼りになる唯一の稻生沢川水系の面積はおよそ75平方キロメートル、年間降水量を1800ミリとすれば、年1億3000万トン、1日平均にすると36万トンになります。3分の1は降雨時、海に流れ去ります。3分の1は蒸発したり、樹木の蒸散、そして地下浸透です。残りの3分の1が表流水または伏流水として利用できます。それは12万ト



稲生沢川河口付近

結果、町が田を買い上げ、下田小学校の農業実習地としましうとう、ここは利用せずに終わりました。これまでは昭和初期までの水道の歴史を語っていただきました。これからは土橋さんが町役場に入庁してからの話になります。

戦争が終わり、一杯水を利用して時間給水の解消へ

終戦後、昭和24年全国一斉で学制変更がされ、中学校の建設をすることになりました。下田町も町民の寄付に合わせ、相ノ山と狼煙崎の町有林を売却して建設しました。中学校建設の残金が50万円あつたので、その金で12年前に開発した一杯水水源を使って既設の管に繋ぎ、時間給水を解消しました。

しかし、家の中に引つ張り込む専用栓も現れ、又々水不足です。

山に登って水源探し 上水道の創設

昭和27年、水不足で水道はチヨロチヨロ、又もや水源探

ンです。農業用水、淡水漁業、温泉源、生活用水などを考えますと、水道として使えるのは1日5万トンが限度でしょう。落合水源を確保した頃、県の担当課に相談して清水町の柿田川湧水と天城山系の狩野川などの水利権を取得したいと持ちかけましたが、夢想論だと退けられました。では、遠い将来には海水の淡水化しか道はないな、と考えました。ある町議会議員から須郷入谷にダムはどうかと提案があり、位置もいので垂涎ものでしたが、ダムは水利問題が起こるし、すぐに埋まって長年持たず、自然破壊に繋がる。しかも費用と効果面で無理だと計画から外したこともありました。

下田の水はしよっぱい

昭和18年、太平洋戦争の激しい時期でした。川崎の軍需工場にいたとき、上司の中山技師が有名な下田を一度訪ねたいと言う。電車の切符は容易に手に入りませんので、東海汽船を利用しました。併走するイルカを見て連想し、魚雷攻撃を受けたらどう

しに追いかけられました。初夏、山に登って田んぼを見渡すのです。

稲の葉の色を品種の違いを念頭にしながら見分け、河内の清流荘の横を見つけました。早速、田を買い上げて井戸を掘りました。



当時の河内水源付近の様子

戦後、河内から下田に温泉を引くとき、地元と激しい論争になったことがあるので、稲生沢村役場に行き、村議会の了承を得て、水道管を敷設、その水源を河内水源といいますが。既設の水道と合わせて1日1,200トンの水量で目的を達成しました。これが下田町上水道の始まりです。